

氏名	佐藤 光
学位の種類	博士（経済学）
学位記番号	第 4140 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学位論文名	『カール・ポラニー社会哲学の今日的意義』
論文審査委員	主査教授 大島真理夫 副主査教授 玉井 金五 副主査 助教授 長谷川淳一

論文内容の要旨

本論文は、前著『ポラニーとベルグソン』（ミネルヴァ書房、1994年）の内のポラニー論関連の三つの章を加筆補正し、未公開資料を詳細に分析した章および序論をそこに加えて、全体としてポラニーに関するモノグラフィーとしてまとめられたものである。

まず「序論」で著者は、現代社会を産業主義が支配し、民主主義も「衆愚政治」にまで墮落した状況にあると特徴づけ、現代社会が陥っているこうした閉塞状況をいかに超えるかという問題を設定したときに、ポラニーがその貴重な手がかりを与えてくれると述べ、ポラニー論への著者のアプローチを明確にしている。ただし、ポラニー以後の現代社会研究の成果をも視野に入れ、ときにはポラニーの真意に反する読解も必要であると付言される。第1章では、『大転換』の主題であるが未完成に終わっている「市場社会と社会の二重運動」論について、その特徴が詳細に述べられ、とくにそこに込められた市場文化批判という文化論的・倫理学的含意が強調される。著者はここで、ブローデルの「三層図式」から着想を得て、社会の伝統的な構造から発する基層社会という概念を作り上げ、以降の議論の基底に据える。そしてこの基層社会をも巻き込んで疾走する市場社会の発展過程を「鳴動する進化」の過程と呼ぶ。

第2章で著者は、拡張する市場経済と自己防衛する社会との二重運動（著者のいう鳴動する進化の過程）という観点から、戦後日本経済の「謎」、つまり戦後日本経済の発展過程での日本社会の自己防衛の独特なあり方（日本における基層社会の重要性と大企業システムへのその社会の取り込まれ方）を明らかにしようとする。そして戦後日本経済の特徴として、基層社会が経済領域に取り込まれて肥大化し、その領域に過剰に浸透した結果、ある種の文化的真空という危険な事態を生み出したことが指摘される。

第3章では、ポラニーの二重運動論の背後にある社会主義思想とそこから浮かび上がってくる彼の思想の道徳的・宗教的側面とペシミズムが明らかにされ、著者はそこに複合社会としての現代社会における自由の問題に直面したポラニーの苦悩をみている。凡庸な社会主義者と著者によって呼ばれるポラニーの社会主義思想の内実が初期の機能主義的・分権的社会主義からスターリニズム（一国社会主義）へと変化した事実の中に著者は、現代社会に対するポラニーの貴重な洞察が含まれており、この洞察が『大転換』最終章で、ポラニー産業社会論のもっとも奥底にある苦悩・ジレンマとなって、いいかえれば産業社会＝複合社会における自由の問題となって現れたとみる。

第4章は『大転換』以後に、現代産業社会における自由の問題に関するポラニーの議論を、『ウィークエンド・ノート』をはじめとする未公開資料に基づいて再構成し、そこから大衆社会としての産業社会の病理を明らかにし、その克服の方向を模索するというポラニーの問題圏を引き出した上で、その深さと広がりという点で彼を超えているか補完すると解釈されるマンハイム、フロム、オルテガ、マッキンタイア、ベラーなどによる産業社会への批判的分析と共同体主義の主張を検討する。著者はポラニーの「自由の認

識」を超えて、マッキンタイアの共同体主義にとりあえざる終着点を設定し、現代において基層社会の要素を「道徳的共同体」へと鍛え上げ、「善い社会」を形成することを展望して、本論文を終えている。

論文審査の結果の要旨

カール・ポラニーといえば、その主著『大転換』（初版1944年）で展開されている「自己調整的市場」への厳しい批判や、この主著以後の経済人類学関連の仕事についてはよく知られているし、従来もっぱらこの面からポラニーが取り上げられてきた。

それに対して著者は、この『大転換』で展開されているにもかかわらず、これまでわが国では独自に論じられることの少なかった「二重運動」論ないし「社会の自己防衛」論、そして社会主義論からポラニーの社会哲学を再構成し、資本主義とその基礎にある産業主義に対する彼の批判の内実、意義、その弱点を、詳細なテキスト・クリティークを通じてあきらかにしており、しかもその検討のために『ウィークエンド・ノート』をはじめとする未公刊資料を精査し、詳細な分析を加えている。この面は特筆に値するといえるだろう。

しかし本論文の意義はそれにとどまらない。上の特徴をそのものとして受け止めれば、たんなる思想史のアプローチからのポラニー論としての業績ということになるが、本論文は同時に、このポラニーの「社会の自己防衛」論という発想を手がかりに、そしてそこにブローデルの三層構造論、マンハイムから現代アメリカの共同体主義者マッキンタイアらの思想を結合させ、ないしそれらによって軌道修正することによって、科学技術の成果をどん欲に吸収して資本主義を暴走させる現代の産業主義がもたらす諸問題の超克の可能性を、すぐれて現実的な方向で提示する。その意味で、本論文はポラニー社会哲学の現代的蘇生を、著者の長年の主張（防衛線としての共同性の回復）と重ね合わせる形で図ろうとした、意欲的な作品である。その結果がポラニー解釈にもきわめて独自な面をもたらしている。それはとくに、ポラニーの二重運動論に内在する「文化的真空」への危機意識、宗教的意識そして自由の実現に関わって現れる深刻なジレンマとペシミズム、こういった面への著者のこだわりのなかに示されている。

現代社会への（とくに日本への）強烈な危機意識を反映したこのポラニー論は、ポラニーの現代への蘇生を促すことは間違いないし、そこから現代社会の閉塞状況からの脱却を展望させるような画期的な理論が出てくることが期待できる。

以上により、本論文は博士（経済学）の学位を授与するに値するものと判定する。